ata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to yo

中務集注釈（一）

高野晴代・高野瀬恵子・森田直美
時田麻子・森田理恵・曾和由記子
佐藤千恵

今集歌人伊勢の娘、中務の家集を取り上げ、注釈を試みる。底本と資経本『中務集』は二五〇首ほどを収載し、屏風歌、歌合歌、賀歌的な歌のほか、贈答歌を多く含む。本稿は、大学院演習および研究の発表、討論において問題となった歌を中心に抜粋し、注釈を施したものである。

歌の文責を次に示す。一～一〇、四五～五〇番（高野瀬）、一一～二三八～四四番（森田直美）、三二～三七番（時田）、二八～三一番田理恵）、五一～五五番（曾和）、五六～五九番（佐藤）。

凡例

本注釈は、資経本（冷泉家時雨亭叢書第六十六巻『資経本私家集二』朝日新聞社　平十三所収）を底本とする。

本文の校合に用いた本は、以下の通り（（　）内は、異同を掲出する際の略称）。

宮内庁書陵蔵本（510・12）（御）※原稿中では、御所本と称す。
西本願寺本（西）
前田家蔵 伝西行筆本（前）
奈良女子大学蔵本（歌）
群書類従本（群）

三　本文は、読解の便のため、適宜、仮名を漢字に、漢字を仮名に改めた。また、詞書内には、必要に応じて句読点を施している。表記を改めた箇所は、右にルビで底本での表記を示した。

四　底本を、校合本によって校訂した箇所は、［語釈等］もしくは、［補説］に、その理由と共に明記した。

一番歌

村上先帝御時御屏風の絵に、国々（国）の名ある所々（所）を描（か）かせ給（たま）ひて、召（め）ししに、吉野（よしの）山

吉野山雪には跡も絶えにしを霞ぞ春のしるべなりける

［異同］　雪には→ゆきかふ（西）

［他出］　信明集二七、麗花集四、新撰朗詠集七〇（作者・中務）、続後拾遺集四（作者・信明）、万代集一八（作者・信明）

［語釈等］　○村上先帝御時御屏風　「吉野山」以下「浮き嶋」までの十首は「村上御時名所絵屏風」と通称される屏風の歌で、中務のほか、信明、忠見、清正、順、兼盛らも作者となったらしいが、年代は未詳。増田繁夫氏は、天暦八（九五四）年の中宮穏子七十賀のために用意されたが、同年正月四日の穏子崩御により、翌年の一周忌法会に用いられたと見られている（「村上朝の名所絵屏風―屏風歌論二」『大阪市立大学文学部紀要人文研究』昭五六・一〇）。また、木船重昭氏（『中務集相如集注釈』大学堂書店　平四。以下、木船注釈と称す）は、康保元（九六五）年の村上天皇四十賀の料であったが、同年五月三日中宮安子の崩御により催されなかったかと推定されている。○吉野山　大和国の歌枕である吉野は万葉集以来数多く詠まれているが、万葉では吉野の川が多く詠まれた。平安期に入ると吉野の山を詠む歌が増え、雪とともに詠むことが常套化した。「朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の山に降れる白雪」（古今・冬・三三二　是則）更に平安後期になると吉野山を桜の名所として意識した歌が多くなる。「吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬかたの花を尋ねむ」（新古今・春上・八六　西行）。

［通釈］　村上先帝の御代、御屏風の絵に、諸国の名のある所々を描かせなさって、歌をお召しになった際、吉野山を

吉野山は、雪のために人跡も絶えてしまっていたが、霞こそが春をいざなう道標であったのだ。

［補説］　当該歌は、『信明集』にも見え、『万代集』『続後拾遺集』は信明の歌として採録している。しかし、『信明集』ではこの名所絵屏風の歌群（三～一七）が別に存し、また『新撰朗詠集』に中務の歌と注されていることから、増田繁夫氏も指摘されるように、中務の歌が『信明集』に混入したものと考えられる。『麗花集』の断簡に作者名があれば判然とするところであるが、生憎その部分を欠いている点が惜しまれる。

また、吉野山では立春に霞が立つという表現は古今集時代から見られるが、当該歌と同時代の類想歌で、下二句が完全に一致する歌が、天暦十年三月の「麗景殿女御歌合」（霞　右）にある。

み吉野は雪ふりやまずさむけれど霞ぞ春のしるべなりける

この歌合の歌は一部を除き作者不明であるが、作者や当該歌との前後関係等、興味深い点が多い。

六番歌

しかすがの渡り

雪はありとまれば苦ししかすがの渡りに来てぞ思ひわづらふ

［異同］　雪は→ゆけは（西・前）、とまれば→ゆかねは（西・前）、わづらふ→たゆたふ（前）

［他出］　新勅撰集一二九一、歌枕名寄四九八五

［語釈等］　○しかすがの渡り　三河国の歌枕。現在の愛知県東部、豊川の河口にあった渡し場。屏風歌などに詠まれ、逡巡の気持ちを表す「しかすがに」と掛詞にした表現が多い。当該歌の場合も掛詞であろう。

［通釈］　しかすがの渡り

雪はあり（進むのは難儀だが）、留まればそれもつらい。このしかすがの渡りにやって来て、さすがに思い悩むことだ。

［補説］　当該歌は、異同が多く、特に上二句は他系統本・他出すべて「ゆけばありゆかねば苦し」となっている。『信明集』（名所絵屏風の同題歌）には、

ゆけどきぬくれどとまらぬ旅人はただしかすがのわたりなりけり　（一一）

とあり、やはり上二句が対句の類想歌となっているが、雪との関連は見られない。二首を比べると、中務の歌のほうが、渡りを前に思い悩む旅人の実感あふれる歌となっているが、初句の「雪は」と「ゆけば」の問題はいささか厄介である。

実は同時代の「しかすがの渡り」を詠んだ屏風歌の中には、次のような例がある。

冬、しかすがのわたりにゆきふる、たび人ふねにのりてわたりする所

ゆきやらずかへりやせましかすがのわたりにきてぞおもひたゆたふ　（能宣・一三一）

また、『万葉集』における「しかすがに」の用例を見ると、

打霧之　雪者零乍　然為我二　吾宅乃苑尓　鶯鳴裳　（巻八・一四四一　家持）

等、全十二例中、八例が「雪」とともに用いられている。更に右の歌は、平安期には、

かきくらし雪はふりつつしかすがにわが家のそのに鶯ぞなく　（後撰・三三　よみ人しらず）

と、『後撰集』及び『拾遺集』（春・一一　家持）に採録されていることから、この歌が愛唱され、「しかすがに」と「雪」とは、イメージとして結びついていた可能性も考えられる。木船注釈は、初句を改訂して「ゆけばあり止まれば苦し」とし、「行けば行ったで苦しい。止まれば止まったで、また苦しい」と解されているが、「ゆけばあり」が「行けば行ったで苦しい」の意になるかどうか、問題が残る。当該歌の場合、「雪は」のままでも解釈できることから、底本どおりとした。

十一番歌

正月山里にて十二首　峰の霞

ゆきまじりあまてる空もことよせて峰の霞も立ち出でにけり

［異同］　なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］　なし

［語釈］　○山里十二首　詞書には、中務は山里で十二首の歌を詠んだとあるが、集には十一首しか所収されていない。また、『恵慶集』には、中務の居る山里を訪ね、この歌群を見て、同じ題で詠んだ歌群があるが、この詞書では「春歌十ありける」とされ、十首が所収される。両集の全ての山里詠は、補説①に挙げる。　○峰の霞　歌題「峰の霞」は、『中務集』と、それを踏まえた『恵慶集』にのみ見られる。　○ゆきまじり　「ゆき」は「行き」と「雪」を掛ける。　○あまてる空　「あまてる」が冠されるのは、『万葉集』以降、「月」「神」の用例が圧倒的。「あまてる空」の例は、当該歌の他は、時代的にかなり下る次の一首のみ。「くもりなく今もますみの鏡とはあまてる空のひかげにもしれ」（玉葉・二七五〇　荒木田経顕）。

［通釈］　正月、山里で詠んだ十二首、峰の霞

峰に行き交じると、雪が降り交ざり、空もそれに事寄せて明るく照るにつけ、峰に霞も立ち現れたことだ。

［補説①］　以下、参考として中務の山里十二首（実際には十一首）と、これを見て恵慶が詠んだ十首を掲出しておく。

○『中務集』（底本）十一～二一番歌「山里十二首」

正月山里にて十二首　峰の霞

ゆきまじり天照る空もことよせて峰の霞も立ち出でにけり（十一）

谷の鶯

山深くたづねざりせば鶯の谷になくねとたれかつげまし（十二）

残雪

春の気はさむからねども山がくれ友待つ雪は消え残りけり（十三）

春風

氷とく風の音せし朝よりこゑまさりにき山川の滝（十四）

梅花

山里にをりみつれども梅の花ほかにかはらぬにほひなりけり（十五）

山桜

咲けば散る咲かねば恋ひし山桜思ひ絶えせぬ花の上かな（十六）

岸柳

いとゝくぞ色づきにける青柳のめにまづ春の見ゆるなるべし（十七）

をかの松

片岡の松の上なる白雪は年ふる人の身にこそありけれ（十八）

旅寝が草の枕

旅寝する草の枕も枯れにけり生ひけりやとも雪間をぞ待つ（十九）

恋

我宿は山辺をわたる白雲のしる人なくはたちやよらまし（二〇）

山里の月

柴の戸を開けながらにぞ臥しにけるさしいづる月の影にまかせて（二一）

○『恵慶集』（書陵部本）四三～五二番歌「山里十首」

中務の君、山里に居て、春歌十ありけるを見る。その題は峰の霞、谷の鶯、残りの雪、春の風、梅、桜遅し。

峰の霞

訪ふ人もなき山里はいとどしく春の霞に道やまどはん（四三）

谷の鶯

鳴きぬとや立ち居待ちつる鶯は谷の内より声ぞ聞きつる（四四）

残りの雪

春立ちて残りの雪は消えぬとも花をかたみに見てもへぬべし（四五）

春風

あらたまのひと夜ばかりをへだつるに風の心ぞこよなかりける（四六）

梅

匂ふ香をたくはへものにしたるかなかたえやつまに挿す梅により（四七）

桜おそし

山桜待つに心を尽しては惜しまんほどはいかにせよとぞ（四八）

柳

春来ればこずえも知らず青柳の糸に心をよせ見たるかな（四九）

をかの松

かたらはむ人もなきかな山里はをかの松風そよりの他には（五〇）

旅の思ひ

春をあさみ旅の枕に結ぶべき草葉も若き頃にもあるかな（五一）

恋

ふるさとを恋ふる袂は岸近み落つる山水いづれともなし（五二）

［補説②］ 中務の山里詠は、当該歌の他出である『拾遺集』三六番歌の詞書が、「子にまかりおくれて侍りけるころ、東山にこもりて」とあることから、子を亡くした後の山里籠りの中で詠まれたと考えられる。また、『拾遺集』には他に、次の二首の中務による哀傷歌が採録されている。

むすめにおくれ侍て　中務

忘られてしばしまどろむほどもがないつかは君を夢ならで見ん（一三一二）

むまごにおくれ侍て

うきながら消えせぬものは身なりけり羨ましきは水の泡かな（一三一三）

この二首を含む十二首から成る一連の歌が、「ため本しぼちのもとへ、十二首」と詞書して、底本二八二～二九三番に収められている。「ため本しぼち」とは、大江為基のことであろう。中務が、この十二首を為基に遣わしたのは、「新本意」という呼ばれ方から、為基が出家して間もなくの頃と考えられる。為基は、永祚元（九八九）年に図書権頭に遷任後、出家している。ただし、『拾遺集』三六番詞書の「子」と、一三一二番の「むすめ」が同一人物である保証はなく、これによって山里十二詠の詠歌時期を断定するには確証に欠ける（熊本守雄『恵慶集 校本と研究』桜楓社　昭五三）。

十三番歌

残雪

春の気はさむからねども山がくれ友待つ雪は消え残りけり

［異同］ なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］ なし

［語釈］ ○春の気　当該歌の他は、用例が見いだせない表現。春の気配、春の気候の意か。漢語「春気」を摂取した表現か。○友待つ雪　地面に消え残った雪を擬人化し、後から降ってくる雪（友）を待っていると見た表現。

［通釈］ 残りの雪

春の気候は寒くはないけれど、山陰には、後から降ってくる友を待つ雪が、消え残っていたことよ。

二〇番歌

恋

我宿は山辺をわたる白雲のしる人なくはたちやよらまし

［異同］ なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］ なし

［語釈等］ ○白雲の知る人なくは　「白」「知」と、「しら」の音を繰り返して詠む例は、「君が行くこしの白山しらねども雪のまにまにあとはた

づねむ」（古今・離別・三九一　兼輔）など、『古今集』以降見える。当該歌と同じく「白雲」を詠む例としては、「白雲のしらぬ山路に隠れなむかかる浮世のところせき身に」（元真・二五七）、「世の中を何にたとへん吹く風は行くえも知らぬ峰の白雲」（順・一二三）などが挙げられる。

［通釈］　恋

私の宿は、山辺をわたる白雲を知る人がいないように、知っている人がないので、誰が立ち寄ってくれましょうか。誰も立ち寄ってはくれませんよ。

［補説］　当該歌以前、また同時代において、「恋」と言えば男女間の恋情を読むのが通例である。しかし中務は、自分の〝現在〟、すなわち、山里に居る孤独な境遇に即し、「人恋しさ」と言うべき心情を詠む。そして恵慶もまた、中務の歌を汲んで、「ふるさとを恋ふる袂」と「郷愁」を詠んでいる（十一番歌の補説①『恵慶集』五二番歌を参照のこと）。「恋」と題して、このような歌を詠む例は他例が見出しがたく特徴的である。

二一番歌

山里の月

柴の戸を開けながらにぞ臥しにけるさしいづる月のかげにまかせて

［異同］　なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］　なし

［語釈等］　○山里の月　笹川博司氏（「『山里』の自然美の形成―『拾遺集』春夏から『後拾遺集』秋冬へ」『平安文学の想像力』平十二所収）は、『古今集』では秋冬に傾斜していた山里の歌が、『後撰集』では春夏に傾く。『拾遺集』では、再び秋の山里詠が九首も入集し、『後拾遺集』から一転して秋冬に大きく傾斜し、この傾向は、おおむね『新古今集』まで続くとされる。こうした傾向から考えると、当該歌は春の山里歌である点で、拾遺集時代においては珍しいと言える。

［通釈］　山里の月

柴の戸を開けたままで臥したことだよ。空にさしのぼる月の光が家にさし入り、また戸をさすのにまかせて。

［補説］　中務の山里十二首は、十一番歌・補説②に述べた通り、子を亡くした後間もなくの詠と推定される。しかし一見すると、これらに詠み込まれるのは山里の初春の自然で、亡き子への哀傷といった性格は見出しにくい。例えば十一番は、雪・日光・霞が擬人化され、峰で寄り集まるような趣向で楽しく、十四・十五番では、雪溶けで勢いを増した川の音や、都と変わらない梅の香を詠む。このように、十七番「岸柳」までは、大方、山里の豊かな自然を満喫している様な、明るい詠みぶりである。

その様相が一転するのが十八番「をかの松」で、松に積る雪を「老いの身」に準える。続く十九番は、それほど悲観的な雰囲気ではないが、枕も結えぬ、草の枯れ果てた情景を詠み、当該歌では、月の光が射しこむのも構わず、戸を開けて臥す我が身を詠む。「光が戸をさすのにまかせて」と、言語遊戯的表現とも受け取れるが、女性が月に身をさらすことの禁忌性は『竹取物語』や『枕草子』をはじめ、平安朝の多くの作品から知られる。しかし、詠作時の中務は、その禁忌を気に留めることもせず、月の光に身をさらす。

また、山中に孤独の中で、月と対峙する姿から、『大和物語』一五六段の「姨捨」を想い起こすことも、穿ちすぎではないだろう。しかも、迎

えに来てくれるはずの子を既に亡くしたと思される中務にとって、山里の月は、姨捨山の嫗以上に、悲しく、救われないものであったと言えるのかもしれない。

当歌群は、前半の山里逍遥から、老いと孤独を実感する後半へ向かう。中務は、山里の豊かな自然に癒されつつ、一方ではその自然から、我が身の孤独を思い知るのである。

二八番歌

又人の五十の賀せさせ給屏風哥に　若菜

若菜をひん野を標めをかん君がため千歳の春も我ぞつむべき

［異同］又人の五十の賀→前斎宮の五十賀の御屏風（西）さきのさい宮の五十のがしたまふ屏風の（前）賀せさせ給御屏風（歌）、わかなをひん→わかなおふる（西）わかなつむ（前・歌）、野をしめ→のとしめ（前）、はるも→はるを（前）春は（歌）、つむべき→つかへむ（西）

［他出］なし

［語釈等］○五十賀　西本願寺本、前田家本の詞書に従えば、「前斎宮」の五十賀。なお、前斎宮は宇多天皇第二皇女柔子内親王と考えられる（補説参照）。○柔子内親王（？～九五九）。母は内大臣高藤の娘、女御胤子。同母兄弟に醍醐天皇・敦慶親王（中務の父）らがある。寛平四（八九二）年二月、妹君子とともに内親王となり、同九年七月、醍醐天皇の践祚により斎宮に卜定され、以後三一年間を伊勢で過ごす（平安朝の斎宮では最長の在任期間）。延長八（九三〇）年斎宮退下。天慶三（九四〇）年頃、五十賀が行われ、その屏風のために中務が歌を詠んでいる。中務集、日本紀略によると、天徳三（九五九）年正月二日に薨去。六条斎宮と号する。○若菜　正月子の日（後に七日）に、野に出て若菜を摘むこと。稲賀敬二氏は、中務は、貫之の宇多法皇六十賀（延長四（九二六）年）の屏風歌「わかなおふる野べといふのべを君がため万代しめてつまむとぞおもふ」（貫之集・一八九）を念頭に置いたとしている（「女流歌人中務（73）―歌で伝記を辿る―家集の構成（二）・柔子内親王五十賀屏風歌」『礫』平十二・七。以下、「女流歌人中務（73）」）。○野をしめ　万葉集では、「我がしめし野」と女性を独占することの喩えとして用いることが多い。「瞿麦者　咲而落去常　人者雖言　吾標之野乃　花尓有目八方」（万葉・巻八・一五一〇　家持）○つむ　「摘む」と「積む」を掛ける。

［通釈］また、人の五十賀をおさせになる屏風の歌に、若菜

若菜が生える野に標を立てておきましょう。あなたのために、千歳の春も若菜を摘み、千歳の寿命を積めるように。

［補説］底本二八から三一番歌は、西本願寺本、前田家本の詞書により、前斎宮の五十賀での屏風歌とされる。では、この「前斎宮」とは誰を指すのだろうか。

斎宮経験者で「五十」の賀を祝う事のできる長寿を保った女性は、宇多天皇皇女柔子内親王と重明親王の娘（醍醐天皇孫）徽子女王の二人が挙げられる。『日本紀略』の崩年などから柔子内親王は天慶・天暦の頃（九四〇・九五〇年代）には五十歳を迎えていたと思われ（稲賀氏は仮に天慶九（九四六）年とみなす）、徽子女王が五十歳になったのは天元元（九七八）年であり、三十年以上の開きがある。

秋間康夫氏は、中務が村上天皇と強い結びつきを有していることから、前斎宮を斎宮女御徽子女王と擬している（「中務の詠歌活動をめぐって」『拾遺集と私家集の研究』平四・八　初出：『同朋大学論叢』昭五

九・六）が、渡辺純子氏（「『中務』小考―伝記を中心として―」『香椎潟』昭四七・三）、稲賀敬二氏（「女流歌人中務（73）」）、木船注釈は柔子内親王であるとみなしている。

確かに、『中務集』に納められている屏風歌の大部分は、村上天皇の召しによるものであり、中務の公的歌人としての活躍は、村上治世が中心をなしている。しかし、叔母と姪という間柄を考えれば、中務が柔子内親王の五十賀に歌を詠むのはごく自然なことと思われるので、当該歌を柔子内親王五十賀屏風歌とみなし、九四〇年頃に詠じられたと考えたい。

二九番歌

鶴遊ぶ

君と言へば命を譲る葦鶴の雲の上をや思ひやるらん

［異同］　つるあそぶ→つるのあそぶところ（西・歌）つるあそぶところ（前）、君といへば→君とへば（歌）、あしたづの→あしたづは（前・歌）、雲のうゑ→雲の中（西・歌・前）、おもひやる覧→おもひいづらむ（西）

［他出］　なし

［語釈等］　○君と言へば　和歌での例は少ない。「君といへば見まれ見ずまれふじのねのめづらしげなくもゆるわが恋」（古今・恋四・六八〇　忠行）○命を譲る　「命をゆづる」と詠む例は、当該歌の他に見いだせないが、「よはひをゆづる」と詠む例は若干ある。「あしたづの千代のよはひをさしながら君にゆづるとなづくるかくも」（海人手古良集・八〇）○雲の上　ここでは「宮中」を指す。『万葉集』以来の歌語である葦鶴は、大空を飛ぶ鶴ではなく、もっぱら地上にいる鶴として詠まれ、殿上から下りた廷臣を葦鶴に寓して詠む類型的表現も生まれた。また、「あしたづのひとりおくれてなくこゑは雲のうへまできこえつがなむ」（古今・雑下・九九八　千里）のように、雲の上（宮中）に憧れる葦鶴（自分）という詠まれ方もされている。なお、底本以外は「雲の中」となっているが、「雲の中（なか・うち）」は「雲の上」と比べると、例が少なく、「はぐくみて君すだてずは鶴の子の雲の中にや千よをしらまし」（元輔集（歌仙家集本）・五四）のように、宮中を表す例もあるが、「雲の上」よりは希な表現である。

［通釈］　鶴が遊んでいる

あなたのこととなりますと、命をも譲る葦鶴は、雲の上（宮中）に思いを馳せているのでしょう。

三一番歌

浜の貝拾ふ

漁りする浦ものどかに波たてゝ今日はかひある心地こそすれ

［異同］　はまのかひゝろふ→はまにかひゝろふ（前・歌）はまにかひゝほふ（西）、あさりする→いさりする（歌）、うらものどかに→はまべのちかき（前）あまものどかに（歌）

［他出］　なし

［語釈等］　○貝拾ふ　「かひ」は「貝」と「甲斐」を掛ける。貝拾いを主題とした屏風歌は、当該歌以外確認できない。○漁りする　「潮のまにあさりするあまもおのが世世かひ有りとこそ思ふべらなれ」（後撰・恋三・七五八　長谷雄）○波たてて　桑原博史氏、杉谷寿郎氏共に（『新

編国歌大観』）「波たてて」とするが、稲賀敬二氏（「女流歌人中務（73）」）、木船注釈は「波たてで」とされている。逆接（波を立てない）ならば、「波たてで」ではなく、「波たたで」となるはずであり、歌の流れから鑑みても順接表現がふさわしい。また、平安期において、のどかな波を詠んだ例も存在している（「白浪ののどけき浦の姫松は千年のかずぞそひて見えける」（兼盛集・六八）ので、「波たてて」を採用した。　○かひある心地こそすれ　「…心地こそすれ」は、古今集以来例がある。当該歌の「かひある心地こそすれ」という表現は、天徳四（九六〇）年内裏歌合出詠歌（「もろともに心をよする白波のそこのかひある心地こそすれ」（天徳四年内裏歌合・四八・朝忠））との相似が見える。なお、本歌合には、中務も右方として出詠しており（稲賀氏によれば、当時中務は四九歳前後）、当該歌が、柔子内親王五十賀屏風歌（九四〇年頃）とみなせるならば、先の朝忠歌に何らかの影響を与えた可能性も考えられるだろう。

［通釈］　浜の貝を拾う

貝を漁っている浦も、のどかに波を立てているので、今日は（貝を拾うことができて）甲斐のある心地がすることだ。

三二番歌

三条のおほゐまうちぎみの賀、権中納言の奉り給ふ屏風の絵に花見て帰るところ

飽かで今日帰るとおもへど山桜をるべき花ぞ尽きせざりける

［異同］　まうちきみ→まちきみ（前）、奉り給→つかうまつれる（西）つかうまつる（前）、屏風のゑ→のゑナシ（前）、花みてかへる→花みてあそふところ（前）、かへるとおもへと→かへるとおもへは（西）　山桜→はなさくら（西・前）、をるへき花→をるへきはる（西・前）

［他出］　詞花集一六六、風雅集二一七四

［語釈等］　○三条のおほゐまうち君の賀　風雅和歌集の詞書「廉義公」から、藤原頼忠の賀か（補説参照）。○藤原頼忠　九二四～九八九。天禄二年右大臣、貞元元年左大臣。木船注釈では、「賀」は天禄四年正月。頼忠叙従一位、五十賀とみる。○権中納言　天禄四年の賀と仮定すると、当時の権中納言は藤原為光と源重信である。○をるべき花　木船注釈では、「をる」を「折る」と「居る」を掛けたものであるとする。しかし、「折る」と「居る」が、明らかに掛詞の関係にあるものは用例が少ない。当該歌の場合、「をる」は直接「花」にかかっており、「居るべき」は連想しづらい。○つきせざりける　伊勢の贈歌に答える形の歌が先行例としてあげられる。「聞く人もあはれてふなる別にはいとど涙ぞつきせざりける」（後撰・哀傷・一三九五　読人不知）。後代には、「ねをなけば袖はくちてもうせぬなりなほうきことぞ尽きせざりける」（千載・恋・九〇五　和泉式部）があるが、「花＋つきせざりける」は他例が見いだせない。

［通釈］　三条の大臣の賀に、権中納言の奉られた屏風の絵に、花を見て帰るところを

十分に満足するまで見ないうちに、今日帰ると思うけれど、折るべき花は尽きなかったことよ。

［補説］　語釈の欄で述べたように、「三条のおほゐまうちぎみ」は頼忠であり、その五十賀の屏風であるというのが妥当な推測であろう。渡辺純子氏（「『中務』小考―専門歌人としての中務の性格」『平安文学研究』昭四八・十二）は、右大臣定方と見ておられるが、これは後出三四番歌が

『後撰集』に取られており、かつ諸本に存在することから、後の混入が考えにくいことを大きな推論の根拠としている。しかし『後撰集』一八六番歌は読人不知の歌であることから、他の解釈を取り得る。定方の賀とすると、承平二（九三二）年の定方六十賀となり、中務のかなり若い時期の詠歌ということになってしまうので不審である。やはり「廉義公」の表記に従うのが穏当であろう。頼忠と考えた場合、時期としては、頼忠の官位から見て、四十賀では早すぎる。また、六十賀では中務の年齢が相当高くなってしまう。やはり最終的には『公卿補任』に記載のある「五十賀」と考えたい。

本文第三・四句は、西本願寺本、前田家本とも本文は「花桜をるべき春」とされている。この場合「花桜を折ることのできる春」と通釈できる。しかし「をるべき春」では先行、後代とも用例が見いだせない。一方、「花」を「をる」とする歌は多数。「をるべき花」の例は、

秋の野は折るべき花もなかりけりこぼれて消へむ露の惜しさに

（後拾遺・秋・三〇九　源親範　土御門右大臣家歌合によめる）

がある。詠歌年代は一〇三八年（新大系）か。

一方、「山桜折る…」という流れに着目すると、

たまぼこのみちゆきぶりにやまざくらをるとやはなのわれをおもふらん（躬恒・七六）

という例がある。「花」で矛盾を生ぜしめるわけではないので、校訂するほどの根拠があるかは疑わしい。本文どおり「山桜をるべき花」とし、校訂は行わなかった。

三四番歌

橘（たち花）に郭公なく

色かへぬ花橘（はなたち花）にほととぎす千代（ちよ）をならせるこゑきこゆなり

［異同］郭公なく→ほと、ぎすのなくに（西）、ちよをならせるこゑきこゆなり→ちとせならぶるこゑぞきこゆる（西）

［他出］後撰集一八六（読人不知）

［語釈等］○色かへぬ花橘　橘は「橘者（たちばなは）実左倍（みさへ）花左倍（はなさへ）其葉左倍（そのはさへ）枝尓霜雖降（えだにしもおけど）益常葉之樹（ましときはのき）」（『万葉集』巻六・一〇一四）のように、常緑樹であることから変わらぬものとして歌われた。同様の例として「ときはなる花とおもへばやほととぎすはなたちばなにこゑのかはらぬ」（古今六帖・四二五一　貫之）などもあるが、「色かへぬ」という語句とともに詠まれる植物は「松」「竹」が圧倒的で、「橘」は見いだせない。○千代をならせる　「千代」は千年、非常に長い年月。「ときはなるはなたちばなにほととぎすなきとよめつつちよもへぬかな」（古今六帖・二二五八　貫之）のように、賀や祝意をこめて用いられることが多い。「ならせる」は慣れ親しませるの意。

［通釈］橘にほととぎすが鳴く

とこしえに色を変えない花橘にとまっているほととぎすの、一千年を慣れ親しませるような声が聞こえるのだった。

［補説］木船注釈では当該歌は「借用の読み人知らず歌」とされる。この一連の屏風歌が天禄四年のものであったとすると、『後撰集』には採られ得ないこととなるためである。ほかに新井裕子氏は「若年の詠の再利

用」という考え方もあることを示されている（「中務歌の表現」『語文』平七・三）。屏風歌に、読人不知の歌や、自分の旧作を流用するということがあり得るのかについては、非常に難しい問題ではあるが、現に同じ歌が『後撰集』に採られている以上は、当該歌はこの屏風の製作に合わせて歌われたものではないことは確かである。

三七番歌

年の内に春立つ。雪降れり。梅咲けり。

降る雪の下に匂へる梅の花しのびにかけて春はきにけり

［異同］　春立つ→はるたつ日（前）、雪ふれり→雪ふる（群）、したにに ほへる→したにに、ほる（前）したに、ほふる（西）、しのひにかけて→しのひにはやく（群）

［他出］　麗花集七九

［語釈等］　○年内立春　二十四節気の「立春」が太陰暦の十二月に当たる現象である。当時の暦法下では珍しい現象ではない。用例は必ずしも多いとはいえず、特に、屏風歌での年内立春は他に例を見ない。「年の内に春はきにけり一とせをこぞとやいはむ今年とはいはむ」（古今集・春上・一　元方　ふる年に春立ちける日よめる）が有名である。○しのびにかけて　こっそりと。

［通釈］　年内に春が立つ。雪が降っている。梅が咲いている。

降る雪の下に美しく咲いている梅の花よ、こっそりと春が来たことよ。

［補説］　信明集の二〇番歌に「朱雀院の若宮、御裳着の御屏風の絵」で

おなじところ、雪ふる

降る雪の下ににほへる梅の花しのびに春の色ぞみえける

の歌が見られる（他出　万代集一〇九、玉葉集六三、新後拾遺二一）。この歌は上句が当該歌とまったく同一であり、「しのび」「春」といった語句の使い方、全体を通しての歌意もほぼ同じである。木船注釈では三七番歌を中務作ではなく、信明歌の一部改変、もしくは異文ととらえるが、［他出］で挙げた『麗花集』においては

十二月、春のせちぶしたるとし、むめの花をみて　中つかさ

ふるゆきもしたににほへるむめの花しのびにかけて春はきにけり

と、中務歌として同じ歌が収められている。当該歌は、年内立春ということで、信明の歌をふまえ、さらに「春はきにけり」と表現した、中務の歌と見ることができるだろう。

三八番歌

村上先帝御時、屏風のれうに、野焼く所

春はかく野をのみ焼くと思ふまになべて木の芽もいかでもゆらん

［異同］　村上先帝御時屏風のれうに→村上先帝の御屏風に（西・群）むらかみせんだいの御かりの日（前）、のやく所→のやくるところ（前）の火やくところ（西・群）、なべてこのめも→なべてくさきも（西）なべてのくさき（前）なべて草木のいかに燃（群）

［他出］　麗花集十一

［語釈等］　○いかでもゆらん　「もゆ」は「萌ゆ」と「燃ゆ」の掛詞。こ

の掛詞の例としては、「冬枯れののべと我が身を思ひせばもえても春をまたましものを（古今・恋五・七九一　伊勢）などが挙げられる。

［通釈］　村上先帝の御時、屏風にあてて、野を焼くところ

春はこのようにもっぱら野を焼くと思う間に、おしなべて木の芽もどうして萌え出でるのだろうか。

［補説］　底本三八～四四番歌は、詞書に「村上帝御時、屏風の料」とあるように、村上朝期に作られた屏風に寄せられたものと考えられる。しかし、その制作時期は明らかでない。また、この歌群は西本願寺本では、一七～二一番に載せられているが、底本四一、四三番歌の二首は、「御屏風」とのみ詞書して、別の箇所（三二、三三番）に収録されている。そのため、底本三八～四四番歌が、すべて同じ屏風にあてられたものであるのかどうかも断定はできない。

四一番歌

常夏（とこなつ）

うちはえて見（み）る常夏（とこなつ）に飽（あ）かぬかな日ごとににほふ色（いろ）のまされば

［異同］　うちはえて→うちはへて（西）、あかぬ→あらぬ（西）、ひごとににほふいろのまされば→ひかりをまさる色のみゆれば（西）

［他出］　麗花集四二

［語釈等］　○日ごとににほふ色のまされば　当該歌は、西本願寺本と底本の下の句が全く異なっていることが注目される。底本は「にほひ」を、西本願寺本は「ひかり」を詠う。内容からして、西本願寺本では「光をまさる」の歌意がとり難く、底本の本文を選ぶのが穏当と思われる。この異同が起きた要因については、補説に私見を示す。

［通釈］　常夏

長く久しく見ていても尚、常夏の花は見飽きることがないよ。日ごとに照り映えるような美しい色が増さってゆくので。

［補説］　異同に掲出した通り、本注釈が底本とする資経本『中務集』は、西本願寺本三三番歌、

常夏

うちはへて見るとこなつにあらぬかな光をまさる色のみゆれば

との間に、二箇所の異同が確認できる。上句に関しては、「常夏にあらぬ」では題意に合わず、「飽かぬ」とする底本が穏当と思われる。下句は更に異同が大きいが、やはり西本願寺本では歌意が取り難い。強引に、「輝きを増している花の色が見えるので」と解せなくもないが、平安朝和歌における「光」は、日光・月光を指す場合がほとんどで、花の色や美しさについて「光まさる」といった表現をしている歌は、他例が見いだせない。やはり、「日ごとに照り映える色がまさってゆくので」と、素直に解釈できる底本を取るのが妥当だろう。

西本願寺本が、「光をまさる色」と、花の形容としては、類例の見出し難い表現をしているのは、おそらく、八首後の四一番歌（底本五六番歌）に、

秋のあかつきの花を見るところ

ありあけの光にまさるおみなへし長きよに見む露におきつつ

とあるのに、何らかの影響を受けた結果ではないだろうか。西本願寺本『中務集』では、三三番歌は六丁裏に、四一番歌は七丁裏から八丁表にかけて書写されており、各丁における書写位置は少しずれているが、現存西本願寺本に至る、いずれかの書写段階において、この二首が、ちょう

ど一丁離れた同じ位置に記されていた可能性は充分にある。よって、少し複雑な間違え方ではあるが、ページのめくりミスによる目移りなどで、四一番歌の「光まさる」という表現が、三三番歌を書写する書き手の意識に入り込み、歌の書写に影響を与えてしまったという解釈も、不可能ではないだろう。無論、これが異同の要因だと、断定できるものではないが、一つの可能性として提示したい。

四三番歌

荻の下に鹿鳴く

人知れず荻の下なるさを鹿も穂に出る秋やねをもなくらん

［異同］をぎのしたに→をぎのした（御）御屏風 をぎのした（西）又御屏風のうた をぎのした（前）、ほにいづる→ほにでぬ（前）、ねをもなく覧→ねにはたつらむ（西）ねをばたつらむ（前）

［他出］麗花集五四、夫木集四七一〇、新拾遺集一六一四

［語釈等］○荻と鹿　萩と鹿を詠む例は多いが、荻と鹿を詠む例は、当該歌以前には確認できない。後代例は見出せるが、「さをしかの声ぞかなしき露結ぶ岩田の小野の荻の下臥」（長方・七六）、「おきふしにまだ声たてぬさを鹿の心やゆきて荻の上風」（夫木・三七三〇　信実）など、いずれも十二世紀以降の作。○ねをもなくらん　「ねをもなくらん」という表現は、当該歌以前に例がなく、後代例も少ない。「秋の夜の月すむ山に立つ鹿はつま恋ならぬねをも鳴くらん」（為理・五三三）など。

［通釈］荻の下で、鹿が鳴いているところを

人知れず、荻の下にいるさを鹿も、荻の穂が出る秋には、出てきてねなくのだろう。

四五番歌

左の大臣の御賀の屏風の、大原野の宮

小塩山松風寒し大原のさえのの沼や冴えまさるらん

［異同］底本・御所本のみの所収歌

［他出］続古今集六二二、井蛙抄三八六

［語釈等］○左大臣　続古今集六二二番の詞書（「清慎公の家の屏風」）に従えば、藤原実頼（九〇〇～九七〇）。関白忠平嫡男。延喜十五（九一五）年叙爵、右近衛権中将等を経て、延長八（九三〇）年蔵人頭、翌年参議、天慶七（九四四）年右大臣、天暦元（九四七）年左大臣、同三年に父薨去の後を承け、氏長者。康保四（九六七）年太政大臣。安和元（九六八）年関白、翌年摂政。天禄元年五月十八日薨。○大原野の宮　大原野神社。桓武天皇の長岡遷都のとき、春日明神を勧請したといわれる。祭神は春日神社と同じく天児屋根命で、藤原氏出身の女御や后の参拝が多かった。○小塩山　山城国乙訓郡、現京都市西京区大原野の西部にある山。今日、大原野南春日町大原野神社・勝持寺の西に位置する標高六四一メートルの峰をそれとするが、このあたりは多くの峰が連なり、古くどの峰をさして小塩山と称したかは明らかでない。「おほはらやをしほの山もけふこそは神世の事も思ひいづらめ」（古今・雑歌上・八七一　業平）○さえのの沼　大原野付近にあった沼。未詳。当該歌と後述する元輔の歌以後、鎌倉時代半ばまでは用例も見られない。

［通釈］左大臣の御賀の屏風の、大原野の宮

小塩山の松を吹く風が寒いことだ。大原の冴野の沼は（名前の通りに）一段と冷え　冷えしているであろうか。

［補説］　この歌の「左大臣の御賀」について、木船注釈は「天徳三（九五九）年十二月十五日に勧学院で催された六十賀（『日本紀略』）か」とする。これは当該歌が、『拾遺集』所収の実頼五十賀及び七十賀の歌とは、題・内容とも異なることによる考察である。時期的に近い屏風歌で「大原野」を詠んだものには、次の元輔の歌がある。

ふゆ、おほはらの

をじほやまやま風さむみおほはらのさはべのぬまやさえはじむらん

（元輔集（尊経閣文庫蔵）　一一二）

元輔は『拾遺集』及び家集から、実頼の五十賀及び七十賀にも屏風歌を詠進したことが知られるが、この歌は「う大臣のおなじがの屏風のうた」とある四首のうちの一首で、本に従えば、永観元（九八三）年九月の右大臣（兼家）の賀の歌と見られる。この尊経閣文庫蔵伝俊成筆本『元輔集』は、一九〇首すべてが屏風絵歌・障子絵歌等の絵料歌から成る特殊な家集で、歌仙家集本系統本文に混入する十七首を除いて一類本との共通歌もない、全くの別本としての趣を持つという。同じ賀の歌としては他に「正月、ねのび」「夏、あふさか」「大井」の三首が詠まれ、「大井」は紅葉を詠む秋歌であるから、四季の四首であったと見ることが出来る。一方、『中務集』では、当該歌の後に二首「いなりまうで」「あふさか」の歌があるが、この二首は当該歌のように季節が明確な歌にはなっていない。両集の詞書がそれぞれ正しいとすれば、別々の屏風歌となるが、ともに歌の数が少なめで、「おおはらの」「あふさか」の二つが一致している点や、元輔の歌が中務の当該歌に酷似していることなど、興味深い点が多い。

四八番歌

北の宮の中に奉（たてまつ）り給ふ御扇に

君が手（て）にまかする秋（あき）の風（かぜ）なれば靡（なび）かぬ草はあらじとぞ思ふ

［異同］　此の宮→きたのみや（西・前・歌）、中に→内に（西）うちに（前）、御扇→御ナシ（西・前）

［他出］　和漢朗詠集二〇三、三十人撰一三〇

［語釈等］　○北の宮　底本「此の宮」。他系統本は「北の宮」とする。中務の生きた時代に「北の宮」と呼ばれた人物として醍醐天皇皇女康子内親王（九一九～九五七）がいる。「きたの宮のもぎの屏風に」（拾遺・春・六三　詞書）一方、当該歌と同時の歌である四九番歌は、新古今集（一四九七）に「きさいの宮より内にあふぎたてまつりたまひけるに」の詞書で採られている。この「后の宮」は、諸注釈によれば、村上天皇中宮安子を指すと考えられる。木船注釈は、本文を「北の宮」と校訂した上で、人物としては安子とする（補説参照）。　○中に　他系統本及び前掲の新古今集（一四九七）詞書等から見て、「うちに」、即ち「内裏に」の意であろう。　○靡かぬ草はあらじ　木船注釈はこの表現に『論語』顔淵篇中の句「子為レ政、焉用レ殺。子欲レ善、而民善矣。君子之徳風、小人之徳草、草上之風必偃」の影響を指摘する。［補説］参照。

［通釈］　北の宮が、内裏に献上される御扇に（書き付ける歌として）

帝の御手にゆだねてあおぐ秋の風ですから、徳風に靡かぬ草はあるまいと存じます。

［補説］　「北の宮」と称された康子内親王は、朱雀天皇・村上天皇の同

母姉妹で、中宮穏子を母として誕生、承平三（九三三）年着裳。後に右大臣師輔室となり、仁和寺僧深覚、公季を産んだが、公季産後の肥立ちが悪く、天徳元年六月、坊城第で薨去。稲賀敬二氏の研究（『三十六歌仙の女性　中務』新典社　平十一）では、中務は康子内親王より七歳程度年長と考えられ、尚侍藤原貴子が内親王の裳着に贈った屏風に、母伊勢とともに歌を詠進した、と推定されている。西本願寺本以下の諸本が「北の宮」であること、伊勢・中務母娘と穏子・康子との関係等を考えると、「此」が「北」の誤写である可能性は高いであろう。

しかしながら、『新古今集』では「此の宮（北の宮）」が「后の宮」となっていることも無視は出来ない。これは「后の宮」とする何らかの根拠（異本または異文等）があったのであろうか。木船注釈が「北の宮」と校訂しつつ、「北の宮」を安子とするのは『新古今集』の詞書に引きずられたものであろう。当該歌は西本願寺本・前田家本では「村上天皇御時」の歌に続いて配されており、底本でも「左大臣の御賀」の次に置かれている。或いはそうした配列から当該歌が村上天皇代の歌と解され、更に西本願寺本・前田家本等では「きたのみや」と仮名書きである文字が、「きさいのみや」と判読（若しくは誤読）されて、「村上天皇御時」で「后の宮」と見なされた可能性も考えられよう。ここでは、諸本の表記等から「此の宮」を「北の宮」と校訂したが、詠作年次は未詳であり、康子内親王が朱雀天皇か村上天皇に扇を献上した折の歌、と解しておきたい。

下句は、扇が作り出す風に「天子の徳風」を重ねて言祝ぐ表現で、語釈に示すとおり、孔子が季康子の問いに答えた文言を踏まえている。この句は『藝文類聚』の第五二・治世部上・善政にも引かれており、和歌でも同時代に類例が見られる。

草も木も思ふことあらじ万代は君が扇の風になびきて

（円融院扇合・一四　能宣）

五〇番歌

村上先帝御時の月次の御屏風に、田舎の家に、男客人もの言ふ

梅が香をとめて来たれば珍しき鶯ならぬ声を聞くかな

[異同]　月次の→西・前ナシ、御屏風に→御屏風のゑに（西）、屏風のうた（前）、梅が香を→むめのかを（西）、来たれば→きつれば（西・前）、鶯ならぬ→うぐひすならで（御）、声を→声も（西・前）

[他出]　なし

[語釈等]　○村上先帝御時の月次の御屏風　当該歌以下五九番歌まで十首ある。詞書の内容がほぼ一致し、同時の歌と見られるものが順集（西本願寺本二〇二～二一三）に見えるが、その詞書では「康保五年、女五男八親王の御屏風の歌」。木船注釈はこれを「村上天皇第五皇女盛子内親王の康保二（九六五）年八月廿日始笄、同月廿七日の為平親王元服・輔子内親王始笄の屏風歌（『日本紀略』）」と見る（補説参照）。○とめて　尋ねて、探し求めて。

[通釈]　村上の先帝の御時の月次の御屏風に、田舎の家に、男の客が（来て）言葉をかける所

梅の香りを尋ねて来たところが、鶯ではなくて、めったに聞くことのできない貴女の声を聞くことだ。

[補説]　盛子内親王は生年未詳。村上天皇と中納言源庶明女（父の居所広幡から広幡御息所と呼ばれた）の間に誕生し、康保二年八月着裳。の

ち藤原顕光に降嫁し、重家・元子・延子を生む。長徳四（九九八）年七月二十日薨去。

為平親王（九五二～一〇一〇）は、中宮安子を母として誕生、天徳四（九六〇）年読書始、康保二年八月元服。加冠の役は源高明で、同日、叙三品。翌三年十一月、高明女と結婚。康保四年に冷泉天皇即位の際、弟の守平親王が皇太子となったのは、高明との関係から排されたと言われる。安和の変（九六九年）により、高明配流、為平親王も昇殿を停止されたが、のち許された。染殿式部卿宮と称された。

輔子内親王（九五三～九九二）は為平親王の同母妹。安和元（九六八）年七月斎宮卜定、同年十二月初斎院入り。翌年冷泉天皇の譲位により、初斎院より退下。二品。正暦三年三月三日薨。

木船注釈は、当該歌を画中の女の立場で解し、「わが宿の梅の香を尋ねて求めていらっしゃったので、思いがけず、うぐいすでない、すてきなお方のお声を聞けたことですわ」とする。しかし、「来たれば」（又は「来つれば」）の主語は「男客人」になる。詞書の「男客人もの言ふ」から見ても、ここは男の立場で詠まれた歌とすべきである。

なお、同時屏風の歌と思われる順集の歌は以下の通り。

康保五年、女五男八親王の御屏風の歌

春ゐなか家に女にものいふをとこあり

道とほみ人もかよはぬ梅の花君には風やわきてつげつる　（二〇二）

きじの鳴くをききて、山のさくらをみる

かりにくる人もこそきけ春の野にあさなくきじの近くも有るかな　（二〇三）

山桜このした風し心あらば香をのみつてよ花なちらしそ　（二〇四）

うの花さける家に時鳥きく

卯の花のをらまくほしき山里に時鳥さへきつつなくなり　（二〇五）

みあれひく

わがひかんみあれにつけていのることなるなるすずもまづ聞えけり　（二〇六）

人の家の泉のつらにすずむ

山の井をかつ結びつつ夏衣ひもうちとけてすずむ比かな　（二〇七）

人の家に、をんな二三人出でて、あかつきに花みる

花の色やよのまの風にかはるとてまづおきながら出でてこそみれ　（二〇八）

うみのつらに、しほやき、あみひく

見わたせばあまのたくなは名のみして立つはしほやく煙なりけり　（二〇九）

九月晦日、もみぢ見る

いかなればもみぢにもまだあかなくに秋はてぬとはけふはいふらん　（二一〇）

雨の中に残菊をみる

しぐれつつうつろふみれば菊の花色をしめしめふる雨にぞ有りける　（二一一）

いけに、みづとりあり

あさ氷とけにけらしな水の面にやどるにほ鳥ゆききなくなり　（二一二）

雪ふる日、あづまのかたにおひつらねたり

旅の空くもるくるしなあづまぢのゆききのかたもみえぬ白雪　（二一三）

五一番歌

雉の鳴く声

春霞朝たつ野辺に鳴く雉の羽の音にや人も知るらん

［異同］　なくこゑ→なくナシ（西・前・歌）、のへに→のへと（歌）、なくきじの→たつとりも（西・歌）たつきじの（前）、はねのをとにや→しのばぬねにや（西・前・歌）、人も→人の（前）人は（歌）

［他出］　なし

［語釈］　○雉　雉子とも。『万葉集』には「吉芸志」とも表記され、上代における「雉」の訓がキギシであることはほぼ確定されている。一方キジの方も「春の野のしげき草葉の妻恋ひにとびたつきじのほろろとぞ鳴く」（古今集・雑躰・一〇三三　平定文）と詠まれていて、歌ことばとしては奈良時代のキギシが平安時代になってキギスとキジとへ等価的に分化したとおぼしい。歌題としての形成は、鷹狩などの屏風絵からの影響が色濃い。屏風歌での鳥は多く聴覚として表現されるが雉には特にその傾向が強い。春の鳥であり、家族を呼ぶ鳴き声や、わが身を隠せないですぐ飛び立つ羽音によって存在を知られる鳥としてとらえられている。

［通釈］　雉の鳴く声

春霞が朝たちこめる野辺で、鳴く雉の羽の音によって人もその居所を知るのだろうか。

［補説］　当該歌の問題は第四句の「羽の音にや」である。第四句については底本と御所本以外は「しのばぬねにや」の本文である。他本がこの本文であるのは、おそらく第三句がそれぞれ「たつとりも（西・歌）」・「たつきじの（前）」であるため、雉の鳴く声が表現されなくなるからであろう。

詞書の「雉の鳴く声」からすると、確かに「しのばぬねにや」の方が整合性はあり、木船注釈ではこちらに改めている。しかし、「しのばぬね」という表現は他に用例をみない。逆に「鳴く雉」と「羽音」をどちらも一首に詠み込んだ歌は、当家集以後ではあるが三例みられる。

冷泉院春宮とまうしけるとき、百首歌たてまつりけるによめる

かすが野にあさなくきじのはねおとは雪のきえまにわかなつめとや

（詞花集・春・六　源重之）

原のかれのにきぎす鳴くなり

片岡に柴うつりして鳴く雉子たつ羽音してたかからぬかは

（西行集　七七〇）

春

春の野にかすみをわけて入りぬとはあさなくきじのは音にぞしる

（正治初度百首・三〇七　守覚法親王）

特に守覚法親王の歌は、歌の趣向や言葉からして当該歌の影響を受けている可能性が十分に考えられる。当該歌の第三句では「鳴く雉の」と、雉の鳴く声も表されていることや、後世の歌にも影響があることを考えると底本の「はねのおとにや」の本文のままで読んでも問題ないと判断し、校訂は行わなかった。

五三番歌

卯月に御生引く

神をだに祈りおきてはうち群れて立ち返りなん賀茂の川波

【異同】　卯月に→にナシ（西・前・歌）、みあれひく→ひくナシ（歌）、かみをだに→きみをのみ（西）きみをだに（前）、いのりおきては→いのりを聞は（歌）、かはなみ→うはなみ（西）

【他出】　秋風集六二一、歌枕名寄九六

【語釈】　○御生　神または貴人が誕生・降誕することの意であるが、和歌では京都の上賀茂神社で、葵祭に先立ち陰暦四月中の午の日の夜、御阿礼木に別雷神を移す神事のことをいう。御阿礼の次第は、午後八時に宮司以下祭員（五人）及び矢刀禰五人が御阿礼所にて五本の榊（阿礼木）に遷霊のうえ、本社に神幸、御榊はそれぞれ所定の位置に納めるが、古儀では中央の榊曳いて社頭に立てた。これを「みあれひき」という。和歌には「むかしよりけふのみあれに葵草かけてぞたのむ神のしるしを」（堀河百首・三五七・源顕仲）などのように祭りの様子を詠みあげた歌が多く見られる。○立ち返る　「波が打ち寄せて返る」「もとの場所に戻る」「もとの状態に戻る」「年が改まる」といった意味をもつ。多くは「波」「白波」などとともに用いられ、「波が打ち寄せて返る」の意に他の意味が掛けて詠まれることが多い。○賀茂の川波　「立ち返り」の縁で「かはなみ」と詠んだ。賀茂社の神を象徴する。

【通釈】　四月に御生を引く

神様にさえ祈ったら、寄せては返す賀茂の川波のように、連れだって帰りましょう。

【補説】　当該歌には作者の問題がある。『伊勢集』に当該歌とほぼ同じ歌が収載されている。

みあれひくところ

君をだにいのりおきてはうちむれてたちかへりなむかものかはなみ　（一二二）

木船注釈では、「母伊勢歌を中務が借用した可能性は否定しきれない。」と指摘している。

また、『新撰髄脳』二番歌に、

難波なる長柄の橋もつくる也いまは我が身を何にたとへん

これは伊勢の御が中務の君にかくよむべしといひける也。

とあり、これに関して関根慶子、山下道代両氏著『伊勢集全釈』（風間書房　平八）では「おそらく伊勢が中務に施した和歌教育は、この一首をあげて見せたのみにはとどまらなかったであろう。」とし、伊勢の中務に対する和歌教育の姿勢に注目している。

加藤雄一氏は、「屏風絵に相応しい歌を詠むために、当然伊勢歌を参照したはずである。そして題材が類似しているならば、伊勢の歌の一部を借用し、改めて自分の歌として再構築を試みたであろうことは理解できないことではない。」とされている（「伊勢から中務へ―詠法の継承―」『語文』大阪大学国文学会　平十九・六）。

確かに、伊勢が娘の中務にそれなりの和歌教育を施していたであろうことは想像できる。しかし、当該歌をみると、伊勢歌との違いは初句の「かみ」か「きみ」かという異同とみなせる差であり、伊勢歌の再構築とするには疑問が残る。

また、当該歌を伊勢歌とし、その混入として考えるとしてもいささか問題がある。それは『中務集』では、「村上御時の月次の御屏風」の一連の歌の一首であるので、混入は考えにくいためである。『伊勢集』では、この歌は西本願寺本にしか収載されておらず、家集中、主に日常歌が並ぶ中に配されている。前後の歌は詞書を見ると「なでしこのおもしろきをとなりにやるとて」や「としをへて物いひたる人の」とあるように贈答歌が並ぶ。その中に「みあれひくところ」と屏風歌らしい詞書をもつ

当該歌は若干異質な感がある。

当該歌の異同を見ると、前田家本は初句「きみをだに」の本文であり、他出に挙げた『秋風集』の初句が「きみをだに」であるのも、おそらく前田家本系統の本文を使用したためであろう。このような状況から考えると、本来は中務歌であったのが、『伊勢集』の中に混入した可能性は否めない。

五六番歌

秋の暁に花を見たる所

有明の光にまさる女郎花長きよに見ん露のおきつゝ

［異同］　秋の暁に→秋の院に（御）秋のあかつきの（西）秋あか月（前）秋のあか月（歌）、露のをきつつ→つゆにおきつつ（西・歌）露にぬれつつ（前）

［他出］　なし

［語釈等］　○光にまさる　月や日の光がまさるという表現は少なくないが、光によって、花が照りまさるという表現はあまり見受けられない。○女郎花　平安時代には主に女性やその恋になぞらえて詠まれている。○長きよに見ん　「長きよ」は「夜」と「世」を掛ける。同様に、「長きよ」と「女郎花」を一首に詠み込む例としては、「ながきよをいかにあかしてをみなへしあさがほみればつゆけかるらん（底本一五四）」が挙げられる。○露のおきつつ　「おき」は「置き」と「起き」の掛詞。

［通釈］　秋の暁に、花を見ているところ

有明の光に美しさがまさる、露がおいている女郎花を、一晩中見ていましょう。私も起きつづけて。

［補説］　同時屏風歌と考えられる『順集』二〇八番歌（前掲。五〇番歌補説）は、「夜の間に花の色が変わってしまうから、今夜は見よう」という意味である。対して中務は、「長き夜（世）」に見ようと詠み、皇子たちの元服・裳着にあたり、祝意をこめている点が特徴的である。

五七番歌

山の紅葉見る

今日を見ぬ人も誘はんもみぢ葉に夜の間吹き来る山おろしの風

［異同］　山の紅葉見る→ののみちを見る（西）野もみぢみるところ（前）野のもみぢみる（歌）、今日を見ぬ→けふをらぬ（西・前・歌）、さそはん→さそはぬ（歌）、吹き来る→ふきくな（西）ふくかな（前）、山をろし→こがらし（前）

［他出］　秋風集四二九

［語釈等］　○山おろし（嵐）の風　山から吹き下ろす強い風。『古今和歌六帖』では、「山おろし」と「嵐」を、いずれも分類項目として掲げる一方で、「山おろし」の中にも「嵐」を詠む歌が混じる。『万葉集』では桜とともに詠んだ長歌が一首あるのみ（巻九・一七五一）で、平安時代以降は、秋・冬のものとして詠まれる。当該歌では、山おろしが擬人化され、「今日紅葉を見られなかった人を誘おう」と呼びかける表現になっている。

［通釈］　山の紅葉を見る

今日紅葉を見ていない人も誘いましょう。紅葉に夜の間吹いて来

る、山おろしの風よ。

［補説］当該歌の初句は底本・御所本以外、すべて「今日をらぬ」とされる。しかし、「見ぬ」であっても歌意は通じるため、底本に従い、校訂は行わなかった。木船注釈では「今日をらぬ」と校訂し、「居る」と「折る」を掛けるとされた。しかし、三二番歌の補説にもある通り、「居る」と「折る」の掛詞例は希少である。

五九番歌

雪の降る日、ものへ行く人

雪ふかく行く東路は遠けれど道にて春にあひぬべきかな

［異同］雪のふる日→ゆきふるに（西）ゆきふる（前）雪のふるに（歌）、行あづまぢは→ゆくあづまぢも（西）ゆきあつまれば（前）

［他出］伊勢集四五九（西本願寺本）

［語釈等］○東路　本来は東国への道、東海道を指すが、やがて東国そのものを示すようになった。東国は遠い未開の地であった。春が東から来ることは、たとえば次のように詠まれる。「あづまぢはなこそのせきもあるものをいかでか春のこえてきつらん」（後拾遺集・春上・三　源師賢）。

［通釈］雪のふる日、あるところへ行く人

雪深い、東路を行くのは遠いけれど、きっと道で春に会うだろうよ。

［補説］『伊勢集』四五九番歌（西本願寺本特有歌）は、次のように当該歌とほぼ同一である。

おほゆきにたびゆく人、十二月つごもりに

雪ふかくゆくあづまぢはとひくれどみちにてはるにあひぬべきかな

これは中つかさが集にもいれり

『伊勢集全釈』（関根慶子、山下道代両氏著　風間書房・平八）では左注について「後人の付した注が、本文に混入してしまった一文であろう」と述べられ、さらに考察欄でも「『中務集』の所伝のとおり、これは中務が画中人物の立場に立って詠んだ屏風歌」という解釈をされている。

『伊勢集』西本願寺本の四四四～四八二番歌は他家集増補部分といわれる。そこに当該歌が入っている点からも、本来は中務歌であった可能性が高いのではないか。

高野　晴代（日本女子大学教授）
高野瀬恵子（総合研究大学院大学博士課程在学）
森田　直美（日本女子大学大学院博士課程後期在学）
時田　麻子（同博士課程前期二〇〇七年三月修了）
森田　理恵（同博士課程前期二〇〇八年三月修了）
曾和由記子（同博士課程前期在学）
佐藤　千恵（同博士課程前期在学）